

【源泉泉交游】

ハーメルンの笛と“ゾンビ”の囁き

市当局は、「思い描く図書館づくり」として、「中央図書館」建設を、市の「広報」で盛んに喧伝していますが、その「思い描く」ところが“貧困”では話にもなりません。当局の「思い描く」ところはあくまでも当局の思いであり、「市民の思い」とは“大きくずれている”ことに、まず早く気づき、早々に修正すべきですが、凝り固まった当局の“ゾンビの頭”には無理な注文なのかもしれません。

それどころか、さも優しく親切そうにささやく“ゾンビの声”には警戒の念を要します。それは童話を思い出させてくれます。つまり、美しい音色と旋律にすっかり心を奪われたハーメルンの人たちは、怪しい笛の音に心を奪われ、得体のしれないおじさんに付いて行った結果、すべてを失うはめになりました。と言うお話です。しかし、当局の図書館づくりのシナリオでは笛吹の怪しいおじさんは“ゾンビ”であったと言うのでは更に恐ろしい限りです。そんなおじさんゾンビ“の言う事に付いていくのは危険極まりないことは明らかです。初めから“ゾンビのおじさん”と解っているだけ、まだましなのかも知れませんが、怪しい“ゾンビおじさん”の言う事は真面目に聞いてはなりません。諺にも「君子危うきに近づかず」と言います。ここはやはり当局の言（政策）を疑ってみることだと思われまます。

広報舞鶴10月号8ページには「思い描く図書館づくり」として「市民が気軽に出会い、つながる交流の場となることや、専門的な本と知識豊かな司書により市民一人ひとりの課題解決を支える、皆さんの生活やまちづくりの役にたつ図書館をめざしています。」と一応最もらしく作文していますが、東図書館が無くなり西舞鶴まで出かけなければならないことになれば、東舞鶴の住民（市民の約半数）は気軽に会うことは勿論のこと、どうしてつながる交流の場となるのでしょうか。この言葉の不誠実さこそ言行不一致に導く“落とし穴の言葉”です。東舞鶴の住民は当局（生涯学部）によって、現存していた図書館を壊され、出会いの場を奪われ、交流のスペースを意図的に取り上げられることを前提に、その上での上記「広報」の言葉は、ただ当局の妄想を述べているだけなのか、それとも書いている本人の頭が混乱して、まともにもものが考えられない状態であるのかの判断を要するように思えます。市の「生涯学習部」とは生涯学習をサポートし、図書館を市民に出来るだけ寄り添うように、出来るだけ多くの市民との社会空間を用意するために整備するための部署であるはずですが、それが生涯学習部の存在意義であり、いわば組織の使命であり「大儀」であるはずですが、その大儀を否定する当局の計画は、小儀つまり私利・私欲と言われても仕方がないものです。ここに社会に造反的な当局の思惑の誤りがはっきりと浮かび上がるように見て取れます。ハーメルンの“笛吹きおじさん”の意図は物語には明らかに書いていませんでしたが、当局の“変なおじさん”方の目指すべき意図は、色々想像でき、また、現実と照らし合わせることで様々なストーリーを推測することも、秋の夜長の楽しみの一つと言えるのかも知れません。